

古代インドにおける婚姻についての一考察

—— ヴェーダ文献に見られる妊娠・出生の葛藤を巡る神話から¹⁾ ——

A Study on Marriage in Ancient India: Insights from Mythology Surrounding Pregnancy and Birth in Vedic Literature

天 野 恭 子

Kyoko AMANO

Abstract The period in ancient India when the primary texts of the religious literature known as the Vedas were composed (around the 15th century BCE to the 6th century BCE), marked a significant social transformation from a clan-based tribal society to urban city-states, during which societal structures gradually developed and took shape. While the Vedas, being religious texts, were not intended to describe society itself, we catch glimpses into the social norms of the time through the interpretation of myths. This paper focuses on the oldest Vedic literature, the Ṛgveda (from the 15th century BCE to the 12th century BCE), and the oldest prose text, the Maitrāyaṇī Samhitā (from the 9th century BCE to the 7th century BCE), with the main objective of examining ancient Indian marriage and family structures through the analysis of myths, particularly those depicting scenes of pregnancy and childbirth.

In the myths found in Maitrāyaṇī Samhitā 3.6.8 and 1.6.12, which revolve around the birth of Indra, conflicts between brothers are portrayed. The struggles between brothers with different fathers are discernible in these narratives. It is believed that these myths concerning the birth of Indra were interpretations of the enigmatic Indra's birth story narrated in Ṛgveda 4.18. Both Maitrāyaṇī Samhitā 1.6.12 and Ṛgveda 4.18 also depict the conflicts from the mother's perspective. These mythological texts, which reveal the conflicts faced by women in childbirth and family matters, are of great importance as they shed light on aspects rarely spoken from a female perspective in the Vedic literature.

Keywords Ancient India (古代インド), Vedas (ヴェーダ), Maitrāyaṇī Samhitā (マイトラーヤニー・サンヒター), Birth Myths (出生神話), Pregnancy (妊娠)

1) 本稿は、MS と RV のインドラ出生神話を考察した Amano (2013) を、新たにヴェーダ時代の婚姻、家族観の考察として纏め直したものである。

は じ め に

古代インドにおいて宗教文献群ヴェーダの主たる文献が成立した時代（およそ紀元前 15 世紀から 6 世紀）は、血族を中心とした部族社会から都市国家へと社会が大きく変革した時代であった。その中で、社会制度も徐々に整っていったものと考えられるが、儀礼を巡る宗教的関心を専らその内容としたヴェーダ文献からそのような社会の構造についての詳しい情報を得るのは容易ではない。しかし、ヴェーダに記された神話を読み解くことで社会のあり方の一端を垣間見ることにはできる。本稿では特に、妊娠・出生の場面を含む神話から、古代インドの婚姻・家族について考察を行いたい。

本稿では、最古の文献リグヴェーダ (R̥gveda, 以下 [RV]; 紀元前 15 世紀から 12 世紀頃の成立とされる)、最古の散文文献マイトラーヤニー・サンヒター (Maitrāyaṇī Saṁhitā, 以下 [MS]; 紀元前 9 世紀から 7 世紀頃の成立) を考察の主たる対象とする。MS は解釈の困難さによって研究に用いられることが少なく、古代インドの宗教・社会を通史的に見る際のミッシングリンクとなっていたが、神話を詳しく読み解くことで古代インド社会についての重要な情報を得ることができる²⁾。結婚を示唆し得る単語としては、RV に *vivāhā-*「嫁入り」(原義は「運び去ること」) や *janitvā-*「子を産むこと (その立場)」, MS では *tālpa-*「床」, *sām-bhū*「交合する」の語が見られる。MS に記述されるヴェーダ祭式において、*pātnī-*「妻」は役割を持って祭式に参加するとされることから、ある程度立場の確立した「妻」の存在は窺われる。一方で、例えば MS 1.5.8(2) にはマヌに 10 人の妻がいたと述べられる他、同時代やその後の文献でも複数の妻についての言及は多く、妻帯についての自由度は高かったものと考えられる。本稿では妊娠・出産の場面を含む 4 つの神話 (MS 3.6.8, 1.6.12, 2.1.12, RV 4.18) を考察するが、そこから垣間見えるのは、制度に守られない時代における子作りを巡る、父、母、子、それぞれの立場での葛藤である。

II MS 3.6.8 インドラがヤジュニヤの妻ダクシナーと子をもうける話 (山羊の角を祭式で用いることの由来譚)³⁾

dākṣiṇā vai devēṣv āsīd, yajñō 'sureṣu. tāṁ dākṣiṇāṁ yajñō 'bhyākāmayata. tāṁ abhiparyāvartata. tāṁ sāmabhavat. sā indro 'ved: "yó vā asmād yóneḥ sambhaviṣyāti, sā idāṁ bhaviṣyati=" iti. tāṁ indraḥ prāviṣat. tátā indraḥ sāmabhavat. tátā indro 'jāyata. sā jāyamāno 'ved: "yó vā asmād yóner anyó māt sambhaviṣyāti, mādṛk sambhaviṣyati=" iti.

2) Amano (2009) が MS 全 4 巻のうち 1-2 巻の散文部分を翻訳した。

3) 同様の神話が以下の同時代・後代の文献に見られる：Kāthaka-Saṁhitā [KS] 23.4: 78.17ff., Taittiriya-Saṁhitā [TS] 6.1.3.6f., Śatapatha-Brāhmaṇa [ŚB] 3.2.1.25-28. Cf. Amano (2013), 3-4; Nishimura (2014), 169-186; 西村 (2009), 79-81.

tāyā sahópaveṣṭáyann ajāyata. yān nyāveṣṭayat, tāsmān niveṣṭitā. yān niveṣṭyāmānā śyāvābhavat, tāsmāt kṛṣṇā=, índraṃ ca vā eṣā prēpsati dākṣiṇām ca=, índrasya ca khālu vā etād yónim ālabdha dākṣiṇāyās cātmānam. átho: sáyoniṃ evā yajñám ālabhate.

ダクシナー（『報酬』）は神々の「一員」であった、ヤジュニヤ（『祭式』）はアスラ達の。そのダクシナーをヤジュニヤは欲した。彼女を目当てに周りをうろつき、彼女と交合した。その時インドラは知っていた、「この母胎から生じるであろうもの、この地上にあるものは彼のものとなるだろう」と。彼女のもとへインドラは押し入った。そこから（子）インドラが生じた。そこからインドラが誕生した。その彼は誕生しつつある時に知っていた、「この母胎から私以外の者が生じるとしたら、私と同等の力を持つものとなるだろう」と。[母胎を] 彼女[自身]と一緒に握りながら、彼は生まれてきた。握じった、というそのこと故に、[祭式で使う山羊の角]は握じれている。[彼女が]握じられながら青黒くなった、というそのこと故に、[山羊の角]は黒い。[彼]（祭式の祭主）は、インドラとダクシナーに達しようとしているのだ。このようにして（インドラが母胎を握じって生まれてきたように）実際、インドラの母胎とダクシナーの体を、捕まえたことになるのだ。さらにはまた、祭式を母胎ごと（あるいは「母胎を共にした子ヤジュニヤを」）捕まえていることになる。

この神話においてインドラは、ヤジュニヤと交合した（子をなした）ダクシナーに押し入り、子をなしている。生まれる子もまたインドラと呼ばれているが、これは古代インドにおいては、父は息子となって再生する（つまり父と息子は同一である）という観念があるためである⁴⁾。ヤジュニヤと子をなしたダクシナーに、インドラが子を産ませるのであるから、不義の子という位置づけになろう。

子インドラは、母から他の子が生まれると彼のライヴァルになると考える。将来の兄弟争いが、誕生の前から予見されている。そこで生まれる時に母の母胎を握じって出してしまうのであるが、そのことが「母胎ごと（*sáyoni-*）祭式（*yajñá-*）を捕まえる」と表現されている。これはおそらく「母胎を同じくしたヤジュニヤを捕まえる」という意味を兼ねていると考えられ、ヤジュニヤの子とインドラの子の両方が母胎に宿り、誕生前にすでに争っていたことを想定している。

4) 西村（2016 [2017]）, 180.

3. MS 1.6.12 アディティの末子インドラとマールターンダを兄達が
墮胎する話（祭火設置儀礼の際にバラモンに供される粥の由来譚）⁵⁾

āditir vāi prajākāmaudanām apacat. sōṇṣiṣṭam āśnāt. tāsya dhātā cāryamā cājāyetām.
sāparam apacat. sōṇṣiṣṭam āśnāt. tāsya mitrās ca vāruṇas cājāyetām. sāparam apacat.
sōṇṣiṣṭam āśnāt. tāsya āmśas ca bhāgas cājāyetām. sāparam apacat. sāikṣata =: “ūṇṣiṣṭam
me ’śnat, yā dvāu-dvau jāyete. itō nūnām me śréyaḥ syād, yāt purāstād āśnīyām” iti. sā
purāstād āsitvópāharat. tā antār evā gārbhaḥ sántā avadatām: “āvām idām bhaviṣyāvo,
yād ādityā” iti. tāyor ādityā nirhantāram aichaṁs. tā āmśas ca bhāgas ca nirahatām. . . .
sā vā indra ūrdhvā evā prāṇām +anūdāśrayata. mṛtām itaram āṇḍām āvāpadyata. sā vāvā
mārtāṇḍo, yāsyémē manuṣyāḥ prajā. sā vā āditir ādityān upādhāvad: “āstv evā ma idām.
mā ma idām moghé párapaptad” iti. tē ’bruvann: “āthaisō ’smākam evā bravātai. ná nó
’timanyātā” iti. sā vāvā vīvasvān ādityō, yāsya mānuṣ ca vaivasvatō yamās ca. mānur
evāsmiṁl loké yamō ’múṣmin.

アディティは子孫を欲して粥を調理した。彼女はその残りを食べた。そうすると彼女からダートリとアリヤマンが生まれた。彼女は次の粥を調理した。その残りを食べた。そうすると彼女からミトラとヴァルナが生まれた。彼女は次の粥を調理した。その残りを食べた。そうすると彼女からアンシャとバガが生まれた。彼女は次の粥を調理した。そこで予見した、「私が残り物を食べると、毎回2人ずつ産まれる。このことからするとさて、前もって食べるのもっといいことになるのじゃないか」と。彼女は前もって食べてから、[祭官に] 供した。そうしてお腹の中に[一つの] 胎児として宿った二人は話した、「この地上のすべては我々二人のものになるだろう、アディティの息子たちのものは」と。アディティの息子たち（兄達）はその二人を墮胎させてくれる者を求めた。そこでアンシャとバガが墮胎した。（中略）そうしてインドラは、息につき従って上に飛び出たが、もう一つの卵は死んで落ちた。それが、この地上の人間たちがその子孫であるところのマールターンダ（『死んだ卵』）なのだ。そこでアディティは、息子たちに馳せ寄った、「この私の子を生かして。この私の子が混乱の中で落ちて（死産して）しまわないようにして」と言って。彼らは言った、「それじゃあ、こいつが我々の仲間になると言うがいい。我々より上だと思わなければいい」と。この者が実にアディティの息子ヴィヴァスヴァントなのだ、その彼からマヌとヤマが生まれたところの、この世のマヌとあの世のヤマが。

5) Amano (2009), 254-256; Hoffmann (1976), 437f.; Krick (1982), 269-271; Jamison (1991), 205ff.; 堂山 (2012), 29ff. 同じ神話が KS 11.6: 151.5-15, TS 6.5.6.1-2 等にも見られる；堂山 op. cit. 30-36 を参照。

アディティは子孫を欲して粥を調理した。この粥を食べるという行為が性行為のメタファーであると理解してよいだろう。本来バラモンに供した残りを食べるべきところを、先に食べた（「つまみ食い」）ことでインドラとマルターンダを身ごもったのであるから、上の MS 3.6.8 と同様ここでも通常でない（不義の子の）妊娠を暗に示しているのかもしれない⁶⁾。粥の調理の祭式的背景は、祭式（ここでは子宝祈願）を執り行うために祭官を招待し、その礼・供養として粥を供することにある。

RV において捧げられる讃歌の一番多い神であるインドラについては、RV 4.18 インドラ出生の神話（下の 5.）で捨て子であったと語られるが、RV ではその母がアディティであると言われることはない。おそらくは、出生神話がよく知られるインドラと、母のイメージの強いアディティが、MS の時代に結び付けられたのではないか。*āditi-*「拘束されない」という名によって、不義の子を身ごもる母のイメージと結びついたことも考えられる⁷⁾。

MS 1.6.12 の神話において際立つのは、弟達が、兄達が支配しているこの地上を自分達のものにしてやろう、と画策すること、兄達がそれに気づいて堕胎させる、というくだりであろう。上の MS 3.6.8 と同様、ここでも兄弟間の争い、それも誕生前からの争いがモチーフとなっている⁸⁾。

III MS 2.1.12

アディティが身籠ったインドラを堕胎させる話（王族の出世のために、
インドラとブリハस्पティへの献供を行うことの由来譚）⁹⁾

āditir vai prajākāmaudanām apacat. sōṇṣiṣṭam āśnāt. tāṁ vā indram antār evā gārbhaṁ sāntam ayasmāyena dāmnāpaumbhat. sō 'pobdho 'jāyata. tāṁ vā etēna bṛhaspātir ayājayad aindrābārhaspatyēna. tāsyā tād dāma svayām evā vyāpadyata. sā imā diśo vājrenābhiparyāvartata. yō rāṣṭrīyo néva prastīnnuyāt, tāṁ etēna yājayed aindrābārhaspatyēna.

アディティは子孫を欲して粥を調理した。彼女はその残りを食べた。そこで彼女は胎内にいたインドラを銅のバンドで結紮した（臍の緒をしばって流産させた）。そこで彼は縛られたまま生まれた。彼にブリハस्पティ（神々の中の祭官）は、例の「パンケー

6) Amano (2013), 11; Hoffmann (1976), 429.

7) インドラがアディティの子 (*ādityā-*) であるということと、インドラの太陽神としての表象が結びつき、*ādityā-*が「太陽」を意味するようになった可能性がある; cf. Amano (2022), 1039–1044. RV 8.52.7 はインドラをアーディティアの一つとして数える; cf. Brereton (1981), 297; Witzel/Gotō (2007), 825.

8) ŚB のヴァージョンでは、兄達がマルターンダの命乞いをする役目となっており、インドラ出生の背景に別の解釈をあてていることがわかる。

9) Amano (2009), 469f.

キ], (今日行っている) インドラとブリハस्पティのための「パンケーキ」を供物として祭らせた。彼からバンドが剥がれ落ちた。そこで彼はヴァジュラを手にしてぐるりと全方位に向かった。領有支配権を持ちつつ出世しないものに、このインドラとブリハस्पティのための「パンケーキ」を供物として祭らせるべし。

アディティが粥を調理してインドラを身籠る, MS 1.6.12 と背景を同じくする神話である。最初の二文は全く同じである。ここでは、インドラをどのようにして身籠ったかは語られていないが、やはり出生が妨げようとされていることから、問題のある妊娠と結び付けられている可能性がある。この神話では、アディティは MS 1.6.12 とは別の役割を与えられている。つまり、MS 1.6.12 ではアディティは兄達に墮胎されてしまったマールターンダの命乞いをしているが、MS 2.1.12 では自らインドラを墮胎する。これは神話伝承における矛盾というよりかは、このストーリーの揺れに、アディティの置かれた状況、問題のある（不義の）妊娠という状況での母親の苦悩が物語に反映されたものであると理解できるだろう。

IV RV 4.18 インドラの出生¹⁰⁾

1 *ayám pánthā ánuvittaḥ purāṇó¹ yáto devā udājāyanta víśve /
átaś cid ā janiṣṣṭa prāvṛddho¹ mā mātāram amuyā páttave kaḥ //*

〈母の言葉〉これは太初の道だ、繰り返し見出されたところの、そこからすべての神々が生まれ出たところの。そこから生まれて来て欲しい、大きく成長したのだから。そのようにして（他の場所から出ること）で母を殺してくれるな。

2 *nāhám áto nír ayā durgāhaitāt¹ tiraścātā pārśván nír gamāṇi /
bahūni me ákr̥tā kártvāni¹ yúdhyaí tvena sám tvena pr̥chai //*

〈インドラの言葉〉私はここからは出たくない、ここは入り込むのが難しい。横切って脇腹から私は出よう。為されたことのない多くのことが、私によってなされるべきだ。ある者とは戦い、ある者とは相談するだろう。

3 *parāyatīm mātāram ánv acaṣṭa¹ ná nānu gāny ānu nú gamāni /
tvāṣtur gr̥hé apibat sómam índraḥ¹ śatadhanyām camvòḥ sutāsya //*

〈詩人による説明〉彼は母が去り行くのを目で追った、「いやだ、私は付いて行きたくない、いや、付いて行きたい」[という思いで]。インドラはトゥヴァシュトリの家でソーマを飲んだ、二つの杯に搾ったものから百の勝利に値する「ソーマ」を。

10) この讃歌を特に詳しく取り上げた研究として、堂山（2012）、25-58 がある。

* インドラは母に捨てられたがトゥヴァシュトリに育てられたことが詩人の言葉で説明されている。

4 *kīm sū řdhak kṛṇavad yāmsahāsram* ¹ *māsó jabhāra śarādaś ca pūrvīḥ* /
nahī nv āsya pratimānam āsty ¹ *antār jātēṣūtā yé jānītvāḥ* //

〈出生についての問い〉なぜ彼女は彼を放り出さねばならないのか、千の月と多くの年の間身ごもっていた彼を。彼と同等の者など存在しない、すでに生まれた者たちの間に、そしてこれから生まれる者たちの間にも。

5 *avadyām iva mānyamānā gūhākar* ¹ *īndram mātā vīryeṇā nyṛṣṭam* /
āthód asthāt svayām ātkam vāsāna ¹ *ā ródasi apṛṇāj jāyamānaḥ* //

〈問に対する答え〉非難されるだろうと考えて隠した、母は力漲るインドラを。そして彼は自ら衣を纏い立ち上がった。彼は生まれながらにして〔天地〕両界を満たした。

6 *etā arṣanty alalābhāvantir* ¹ *ṛtāvarīr iva samkróśamānāḥ* /
etā ví pṛcha kīm idām bhananti ¹ *kām āpo ādrim paridhīm ruḥanti* //

〈母の言葉（不安）〉彼女ら（水たち）は生き生きと流れる、天の定めに従い、互いに叫びあいながら。彼女らに聞け、ここで何を語っているのか、どの岩を、堰を、水たちは押し開けるのか。

7 *kīm u ṣvid asmai nivīdo bhananta* = ¹ *īndrasyāvadyām didhiṣanta āpaḥ* /
māmaitān putró mahatā vadhēna ¹ *vṛtrām jaghanvām asṛjad ví síndhūn* //

〈母の言葉（不安）〉一体どのように彼女らは彼のための指示を出すのか —— 水たちはインドラの瑕疵を明らかにしようとしている ——。私の息子は偉大な武器でヴリトラを打ち倒し、これらの流れを解放した〔のに〕。

* 6 および 7 では、インドラを川に流してから、川がインドラの秘密を知ってそれを暴かないかどうかを、母が心配している。

8 *māmac canā tvā yuvatīḥ parāsa* ¹ *māmac canā tvā kuśāvā jagāra* /
māmac cid āpaḥ śísave mamṛṇyur ¹ *māmac cid īndrah sāhasód atīṣṭhat* //

〈母の言葉（捨てたことに対する言い訳）〉少女がお前を捨てたのは私のせいではないのだ。クシャヴァー川がお前を飲み込んだのは私のせいではないのだ。水たちが幼子を寛容に扱ったのはむしろ私のお陰なのだ。インドラが力強く立ち上がったのは私のお陰なのだ。

9 *māmac canā te maghavan vyāṁso* ¹ *nivividhvām āpa hānū jaghāna* /
ādḥā nividdha úttaro babhūvān ¹ *chīro dāsāsya sám pīṇag vadhēna* //

〈母の言葉（捨てたことに対する言い訳）〉私のせいではない、ヴィアンサ（肩を広げたもの＝コブラ）がお前を、才能ある者よ、下に叩きつけて両顎を打ち飛ばしたのは。お前は下に叩きつけられたのに上になり、ダーサの頭を武器で砕いた。

* 8 よび 9 では、インドラを捨てたことによってインドラはむしろ強くなったのだと、自身を正当化する、あるいはそれによって自分を慰めているようである。

10 *gr̥ṣṭīḥ sasūva sthāviraṃ tavāgām* ¹ *anādhṛṣyām vṛṣabhām tūmram indram* /
āriḷhaṃ vatsām carāthāya mātā ¹ *svayām gātūṃ tanvā ichāmānam* //

〈詩人による説明〉牝牛が頑丈で力強い牛を生んだ、襲うことのできない牡牛を、力あるインドラを。歩み出〔させる〕ために舐めなかった子牛を、母は〔生んだ〕、自ら歩むことを自らのために望んだ〔子牛〕を。

11 *utā mātā mahiśām ānv avenad* ¹ *amī tvā jahati putra devāḥ* /
āthābravīd vṛtrām indro haniṣyān ¹ *sākhe viṣṇo vitarām vī kramasva* //

〈詩人による説明〉そして母は水牛を後にも見ていた、「あの神々はお前を見捨てている、息子よ」と〔いう思いで〕。そしてインドラはヴリトラを打ち倒そうという時に言った、「友ヴィシヌよ、もっと広く歩め」と。

* 母は神々がインドラを見捨てていると心を痛めたが、インドラにはヴィシヌのように味方になってくれる神もいた、と詩人が説明している。

12 *kās te mātāraṃ vidhāvām acakrac* ¹ *chayūṃ kās tvām ajighāṁsac cārantam* /
kās te devó ādhi mārḍikā āsīd ¹ *yāt prākṣiṇāḥ pītāram pādagṛhya* //

〈出生後のインドラについての問い〉誰がお前の母を寡婦にしたのか。誰が寝ている〔あるいは〕動き回るお前を殺そうとしたのか。どの神がお前に寛容だったのか、父の足を掴んで亡き者にした時に。

* 「お前が父の足を掴んで亡き者にした時に」は、「誰がお前の母を寡婦にしたか、誰がお前を殺そうとしたのか」の答えになっている。つまり、父がインドラを殺そうとしたので、インドラは父を殺した。

13 *āvartyā súna āntrāṇi pece ná devéṣu vivide marḍitāram* /
āpaśyam jāyām āmhīyamānām ādhā me śyenó mādhw ā jabhāra //

〈問いに対する答え〉困窮して私は犬の内臓を調理した。神々の中に私に寛容な者を見出さなかった。私は女が敬われていないのを見た。そして鷹が私に蜜をもたらした。

* 困窮して犬の内臓を調理し食べたのは、インドラが父殺しの罪を負ったからであろう。女が敬われていない、の女は、インドラの母のことだと考えられる¹¹⁾。つまり不義の子を生んだせいで夫を殺され、そのことで敬われないのであろう。鷹が私に蜜をもたらした、との言葉は、インドラがソーマを手に入れたことを示すと考えられる¹²⁾。インドラはソーマを手に入れたことから強くなり、英雄となる。インドラの未来を予見して讃歌の最後を締めくくっているものと考えられる。

この讃歌の構成を今一度整理したい。前半（1-5）はインドラの出生を、後半（6-13）は出生後のインドラについて語っている。物語の視点が常に移り変わっており一見混乱しているようであるが、実はそれぞれの部分において、母の独白、インドラの独白（前半部）、詩人による説明、問と答え、という流れで話が進んでいる。まとめると次のようになる。

インドラの出生	1	母の独白
	2	インドラの独白
	3	詩人による説明
	4-5	問と答え
出生後のインドラ	6-9	母の独白 不安と言ひ訳
	10-11	詩人による説明
	12-13	問と答え

話の時系列の混乱や、矛盾とも感じられる記述は、3および11の詩人による説明の部分にある。3ではインドラがトゥヴァシュトリの家でソーマを飲んだ（トゥヴァシュトリの家で育った）ことが述べられ、11ではインドラがヴリトラを殺す時にヴィシヌが味方したことが語られる。いずれも、インドラの出生から離れた場面の唐突な挿入に感じられ、神々がインドラを見捨てた、という言葉に矛盾するようでもある。これはおそらく詩人が意図的に言い添えたもので、詩人にとっては英雄インドラがあまりに惨めに描写されることに対して少し抵抗があり、インドラのポジティブな側面に言及したのではないかと思われる。

さて、インドラ出生の謎は、「母はなぜ捨てたのか」と「インドラはなぜ父を殺したか」の問いに核心があると思われる。その答えは、「非難されると考えたから」であり、「父がインドラを殺そうとしたから」であろう。なぜ非難されるのか、なぜ父はインドラを殺そうと

11) 翻訳の多くで、インドラの妻、と理解されているが、この讃歌の中心人物は実はインドラの母であり、彼女が犯した罪とその結末としてのインドラの来し方だと考えると、ここで言及されているのも母だと理解するのがよいと考えた。

12) 鷹（あるいは鷹の姿を取った「韻律たち」）が天界からソーマをもたらす神話は、RV 4.26-27に始まり、MS 3.7.3: 77.7ff., 3.7.8: 85.13ff., KS 23.10, 24.1, TS 6.1.6, さらにそれより後のブラーフマナ文献において繰り返し語られる。辻（1978）, 176-187 にいくつかのヴァージョンが翻訳され、詳しく論考されている。

するのは、これまでの翻訳・研究では、その理由は触れられないか、あるいはインドラが尋常ならざる偉大さを持つため、と理解されてきた¹³⁾。しかし上の2-4で考察したMSの神話と併せて考えると自ずと別の答えが浮かび上がる。MSの神話で母アディティ、あるいは兄達がインドラを墮胎しようとしたのは、MS 3.6.8で語られた、インドラが不義の子であるという背景があったからと考えるとよく理解できた¹⁴⁾。MSはRVよりも後の成立であり、MSの神話をRVの解釈の根拠とはできないが、少なくともMSはRVに語られよく知られていたインドラ出生の謎と母の苦悩について、不義の妊娠の物語として話を展開させたことは間違いないと思われる。

インドラが不義の子という仮定で考察を進めると、父がインドラを殺そうとした、と言われるこの父は、インドラの実の父ではなく、母の夫を指すと考えられる。MS 3.6.8でのヤジュニヤ、ダクシナー、インドラの三者の関係にあてはめると、ヤジュニヤの立場となる。妻から生まれてくる子が不義の子である疑いがあるとすれば、殺そうとする動機は理解できる。MS 1.6.12の神話で、兄達（おそらく父の違う兄達）が生まれてくる弟を殺そうとしたことにも通じるであろう。父の違う子の妊娠・誕生は（しかもインドラのように強靱で乱暴者の父の子であるとすればなおさら）、家族に大きな脅威を与えることもあったと考えられる。

V 「父の願望」の視点から

さて、上に紹介した四つの物語は、いずれも葛藤のある（おそらく不義の）妊娠と出生に関わるものであった。そこには、父、母、子、それぞれの立場の葛藤が読み取れる。ここではまず、物語から父の視点を拾い出す。MS 3.6.8では父インドラがダクシナーと子をなした動機が述べられている：「その時インドラは知っていた、『この母胎から生じるであろうもの、この地上にあるものは彼のものとなるだろう』と。彼女のもとへインドラは押し入った。そこから（子）インドラが生じた。」これはつまり、ダクシナーのことを「強い子を産むだろう」と見立て、子をなしたと見て取れる。父の側の動機が、強い子として自分の種を残したいということにあったことが理解される。

ここでダクシナーは他人の妻であるはずであるが、そのことが妨げとなっていない。そのような女性の貞操が守られ難かったであろう状況は、RV 10.162 無事の誕生を願う歌からも読み取れる¹⁵⁾。そこでは胎児や母胎を毀損する様々な要因を打ち払うことが願われるが、その要因の中に、女性に侵入する別の男性の存在が挙げられている：

13) 堂山 (2012), 25-29 および 52-58.

14) ŚB のヴァージョン (堂山 2012, 32f.) では、兄達はマールターンダを成形し、助けようとする役割を担う。

15) 西村 (2009), 100f. n. 1.

4 *yás ta ūrū vihāraty¹ antará dāmpatī śāye /*
yónim yó antár ārēdhi¹ tám itó nāśayāmasi //

お前の両腿を押し開き、夫婦の間に横たわるもの、母胎の内部を舐めるもの、それを我らはここから消し去る。

5 *yás tvā bhrātā pátir bhūtvā¹ jāró bhūtvā nīpādyate /*
prajāṃ yás te jīghāṃsati¹ tám itó nāśayāmasi //

兄に、夫になり代わり、間男になり、お前に入り込むもの、お前の子（すでに妊娠している胎児）を殺そうとする者、それを我らはここから消し去る。

6 *yás tvā svāpnena tāmasā¹ mohayitvā nīpādyate /*
prajāṃ yás te jīghāṃsati¹ tám itó nāśayāmasi //

夢によって、闇によって、混乱させた後にお前に入り込むもの、お前の子を殺そうとする者、それを我らはここから消し去る。

他の男性の侵入によってすでに宿っている胎児が殺されるという発想は、MS 3.6.8にも見られた。妊娠のメカニズムの当時の理解として、複数の男性との性交がある場合には複数の胎児が母胎の中で争うと考えられていたものと思われる。そこで、他の種に邪魔されることなく自分の子こそが生まれて欲しいという願いを、男性側が持ったものと考えられる。そのような願いは、MS より後代の Jaiminiya-Brāhmaṇa [JB] にも述べられている：

JB I 17 *tasmād u jāyāṃ juguṣsen: “nen mama yonau mama loke ’nyas sambhavād” iti.*
 それ故に [夫は] 妻を守ろうとすべきである、[私のものである母胎に、私のための場所に、他の者が生じることがないように] と [考えて]。

このような願いが吐露される背景には、実際には妻の貞操が守られにくい状況があったと考えられる。男性の「自分の種を残したい」という願望が肯定されていたと考えられ、当時の社会状況としても夫婦関係について制度による保護のようなものはなく、倫理観の在り方も現代とはかなり異なっていたと考えられる。そのような中で、父の異なる子が生まれるケースは稀ではなかったと考えられ、父の立場からはそのような子を排除しようとする (RV 4.18 における父によるインドラ殺害の企て) こともあったであろう。

VI 「子の葛藤」の視点から

MS 3.6.8 および 1.6.12 において重要なテーマとなっているのは、兄弟間の争いである。両方の神話において、すでに誕生の前から、兄弟が生まれることを脅威と考えていた：

MS 3.6.8 「その彼は誕生しつつある時に知っていた、『この母胎から私以外の者が生じるとしたら、私と同等の力を持つものとなるだろう』と。[母胎を] 彼女[自身]と一緒に握りながら、彼は生まれてきた。(中略) さらにはまた、祭式を母胎ごと(あるいは「母胎を共にしたヤジュニヤを」)捕まえていることになる」

MS 1.6.12 「そうしてお腹の中に宿った二人は話し合った、『この地上のすべては我々二人のものになるだろう、アディティの息子たちのものは』と。アディティの息子たち(兄達)はその二人を墮胎させてくれる者を求めた。そこでアンシャとバガが墮胎した。(中略) 彼らは言った、『それじゃあ、こいつが我々の仲間になると言うがいい。我々より上だと思わなければいい』と。」

兄弟間の争いは実の兄弟にも起こったであろうが、インドラの不義の出生と重ねて考え、父の違う子同士の争いと考えれば、なおさらリアリティがある。物語からは、弟の出生に強い嫌悪を持つ兄の心情が読み取れるが、このような弟が出生した後にも争いは続くものと考えられる。インドラは神々の中で英雄であるが、RV 4.18 で「神々はお前を見捨てている」「神々の中に私に寛容な者を見出さなかった」と語られていたように、神々の元々の仲間ではないという描写が RV や MS に見られる¹⁶⁾。出生に由来する影を背負った存在としての表象があったものと考えられる。

なお、上に挙げた神話では言及されていないが、インドラが育ての父トゥヴァシュトリの家で、トゥヴァシュトリの子ヴィシュヴァルーパーを殺した神話はよく知られている¹⁷⁾。これも一つの義兄弟間の争いとして理解することができる。

VII 「母の苦悩」の視点から

RV 4.18 は、インドラを身籠り出生後捨てた母の苦悩が讃歌全体を貫くテーマであった。母の役割や出来事についての転換はあれども、MS 1.6.12 および 2.1.12 でも、インドラを身籠った母の苦悩が描かれていた。すなわち、MS 1.6.12 では兄達にインドラとマールターン

16) RV 2.12.9 (cf. Söhnen 1991, 68 n. 2); MS 1.6.10(4): 102.13ff.; MS 1.10.16(1): 155.7ff.

17) MS 2.4.1(1), TS 2.5.1.1; cf. Oberlies (1998), 253ff., 特に 268.

ダを墮胎されてしまうが、どうか命を助けて欲しいと縋り、2.1.12ではインドラを自ら墮胎してしまう。2.1.12は特に短い言葉で語られ状況を読み取ることが難しいが、他のインドラ出生神話と併せて読み解いた時、やはり母アディティの苦悩からの墮胎であったと理解できる。RV 4.18において「非難されると思って捨てた」母の心情が、MS 3.6.8で語られる不義の子インドラの妊娠と併せて考える時、腑に落ちるのである。プラーフマナ文献や後の叙事詩などにインドラについての神話は多く見出されるが、母の目線からインドラの出生を語るものはほとんどなく、筆者の知る限りMSのアディティ神話とそのパラレルだけであり、それだけに本稿で挙げた神話が当時の婚姻観、家族観に触れる重要な資料であると言える。

ま と め：古代インドにおける婚姻についての一考察

ヴェーダ文献のうち紀元前9世紀から7世紀頃の成立とみられる Maitrāyaṇī Samhitā を中心に考察した。妊娠と出生を巡る神話を考察したが、制度としての婚姻を窺わせる記述はなく、夫婦、親子関係が制度によって守られなかった時代の家族のあり方が浮かび上がった。

MS 3.6.8におけるヤジュニヤの妻ダクシナーがインドラの子を身籠る神話、RV 10.162における妊娠している女性への別の男性の侵入への言及からも、すでに（事実上）結婚していたとしても女性の性は守られ難い状況にあったと考えられる。RV 10.162.5には「兄になり代わり、お前に入り込む」との記述もあり、家族内での性関係にも忌避感がなかった可能性もある¹⁸⁾。ヴェーダ期の中でRVの時代はもちろんMSの時代においても、他部族による略奪、特に農村に対する略奪行為は頻繁に行われていたと考えられ¹⁹⁾、女性が略奪の対象とされることも起こったと想像される。しかし、直接的にそのことに言及した記述は見当たらない。

男性には自分の子を産ませたい願望があり、それが肯定される社会であったと考えられる。一方で、男性には生まれてくる子が自分の種であることに常には確信が持てず、RV 10.162のように祈願に託す部分もあったようである。他の男性の種を打ち負かし、自分の子供が生まれてくることを願ったことが読み取れる。

兄弟間の競争意識には熾烈なものがあり、MS 3.6.8および1.6.12においては、誕生前から兄弟の存在に抵抗感を持ち、死なせようとする場面が語られた。普通の兄弟間にも競争はあったであろうが、異父あるいは異母の兄弟に対してはなおのことであったと考えられ、殺害に至るような争いも起こったと考えられる。

このような社会において、妊娠・出産について受け身であった女性が葛藤を引き受ける状

18) 双子の兄妹ヤマとヤミーの恋愛関係を歌う讃歌がRV 10.10に見られ、同じ題材の物語がMS 1.5.12(1): 81.2ff, KS 7.10: 71.19ff.に見られる。

19) MS 2.1.1-3では略奪行に出かけたり新しい土地に侵攻する場面が言及される (Amano 2009, 428-440)。

況は多くあったと考えられる。ヴェーダ文献において女性の目線で何かが語られることはほとんどないが、RV 4.18 や MS 1.6.12, 2.1.12 において、望まれない（不義の）子を妊娠する女性の葛藤が垣間見えることは重要である。なお、出生後の子育て、子供を取り巻く家族の形態についてはさらに情報が少ない。部族社会における親族による集団生活の中で、現代で言うところの「家族」を区切る線引きはそれほど意識されなかったのであろう。

参考文献

〈一次文献〉

- JB=*Jaiminiya Brāhmaṇa of the Sāmaveda*. Edited by Raghu Vira and Lokesh Chandra. (Sarasvati Vihāra Series, 31.) Varanasi: Arya Bharati, 1954. Repr. Delhi: Motilal Banarsidass, 1986.
- KS=*Kāṭhaka Samhitā*, ed. by S. D. Satavalekar, Pardi: Swadhyaya Manda. 1983⁴.
- MS=*Maitrāyaṇī Samhitā*. Edited by Leopold von Schroeder, 4 Vols. Leipzig: Brockhaus, 1881, 1883, 1885, 1886. Repr. Wiesbaden: Steiner, 1970.
- =*Yajurvediya Maitrāyaṇī-Samhitā*. Edited by S. D. Sātavalekar. 4th ed. Pāraḍi: Svādhyāya-Maṇḍala, 1983.
- RV=*Ṛgveda-Samhitā*=*Die Hymnen des Rigveda*. Edited by Theodor Aufrecht, 2 Vols. 2nd ed. Bonn: Adolph Marcus, 1877.
- ŚB=*The Çatapatha-Brāhmaṇa in the Mādhyandina-Çākhā with Extracts from the Commentaries of Śāyana, Harisvāmin and Dvivedaganga*, ed. by Weber, Albrecht. The White Yajurveda, pt. 2. Berlin: Dümmler, 1855. Repr.: Chawkhamba Sanskrit Series 96, Varanasi: Chowkhamba, 1964.
- TS=*Die Taittirīya-Samhitā*, ed. by Albrecht Weber, 2 Vols. (Indische Studien 11, 12.). Leipzig: Brockhaus, 1871, 1872.

〈二次文献〉

- Amano, Kyoko (2009): *Maitrāyaṇī Samhitā I-II*. Bremen: Hempen Verlag.
- (2013). “Indras Geburt und Aditis Qual — Ṛgveda 4.18 und zwei Geburtsmythen Indras in der Maitrāyaṇī Samhitā”, *Zeitschrift zur Indologie und Südasiastudien* 30, 1–19.
- (2022). “Is Indra a Sun God?” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 70–3, 1039–1044.
- Brereton, Joel Peter (1981). *The Ṛgvedic Ādityas*. American Oriental Series vol. 63. New Haven, Connecticut: American Oriental Society.
- 堂山英次郎 (2012). 「胎児がしゃべる —— 古代インドの英雄神話における異常出生に関する資料 ——」『2011 年度大阪大学大学院文学研究科共同研究「神話表象のアレゴリズム研究 —— 文学・哲学・レトリックに即して」成果報告書』, 25–58.
- 後藤敏文 (1994). インドの夢・インドの愛 —— サンスクリット・アンソロジー』, 上村勝彦/宮本啓一編. 第一章, 神々の原風景 —— ヴェーダ, 3–42.
- Hoffmann, Karl (1976). “Mārtāṇḍa und Gayomārt.” *MSS* 11 (1957), 85–103. *Aufsätze zur*

- Indoiranistik* II, ed. by Narten, Johanna, 422-438. Wiesbaden: L. Reichert.
- Jamison, Stephanie (1991). *The Ravenous Hyenas and the Wounded sun. Myth and Ritual in Ancient India*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Krick, Hertha (1982). *Das Ritual der Feuergründung* (Agnýādheya). Wien.
- Nishimura, Naoko (2014). “úlba- and jaráyū-: Foetal appendage in Veda.” *Journal of Indological Studies* 24-25, 169-186.
- 西村直子 (2009). 「ヴェーダ文献における胎児の発生と輪廻説」『印度学宗教学会・論集』36, 76-100.
- (2016 [2017]). 「ヴェーダ文献に辿る「祭主の人生」」『印度学宗教学会・論集』43, 164-186.
- Oberlies, Thomas (1998). *Die Religion des Rgveda. Bd. I: Das religiöse System des Rgveda*. [Publications of the De Nobili Research Library 26]. Wien: Institut für Indologie der Universität Wien.
- Söhnen, Renate (1991). “Indra and Women”. *Bulletin fo the School of Oriental and African Studies* 54, 68-74.
- 辻直四郎 (1978). 『古代インドの説話 —— ブラーフマナ文献より ——』東京：春秋社.
- Witzel, Michael / Gotō, Toshifumi (2007). *Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster und zweiter Liederkreis. Aus dem vedischen Sanskrit übersetzt und herausgegeben von Michael Witzel und Toshifumi Gotō unter Mitarbeit von Eijirō Doyama und Mislav Ježić*. Verlag der Weltreligionen. Frankfurt am Main, Leipzig: Insel Verlag.